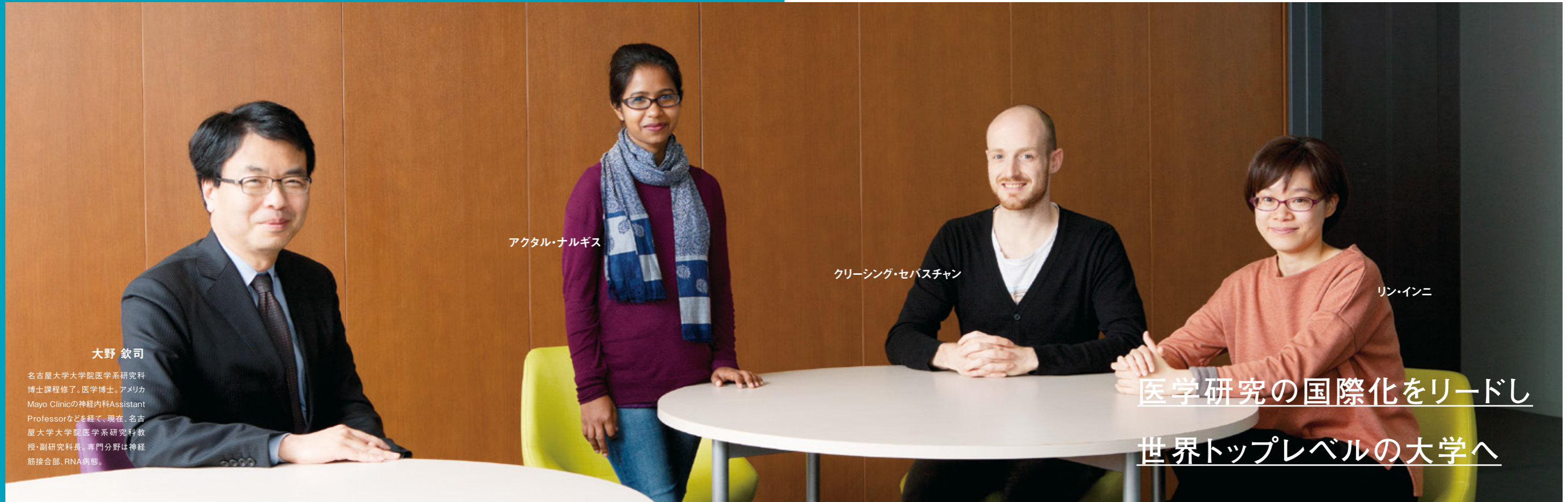


世界最高水準の卓越した研究・教育を展開するために、
名古屋大学大学院医学系研究科・医学部では、
日本の医学研究や医学教育に新たな道を切り拓く活動を進めています。
ここからは国際・研究・教育の領域において、
注目すべき特色ある取り組みを紹介します。

01

国際

座談会「世界を見つめる医学系研究科の挑戦」



大野 欽司

名古屋大学大学院医学系研究科
博士課程修了。医学博士。アメリカ
Mayo Clinicの神経内科Assistant
Professorなどを経て、現在、名
古屋大学大学院医学系研究科教
授・副研究科長。専門分野は神経
筋接合部、RNA病態。

アクタル・ナルギス

クリーシング・セバスチャン

リン・インニ

医学研究の国際化をリードし
世界トップレベルの大学へ

INTERVIEW

未来を拓く最前線

大野 欽司

OHNO, Kinji | 大学院医学系研究科教授 神経遺伝情報学

アクタル・ナルギス

AKTER, Nargis
大学院医学系研究科博士課程3年
細胞生理学 バングラデシュ出身

クリーシング・セバスチャン

GRIESING, Sebastian
大学院医学系研究科博士課程4年
分子腫瘍学 ドイツ出身

林 莹妮 リン・インニ

LIN, Yingni
大学院医学系研究科博士課程4年
神経遺伝情報学 中国出身

名古屋大学大学院医学系研究科では、修士課程の講義の全面英語化、
日本初のジョイントディグリープログラムの導入など、
世界トップレベルの研究大学を目指し、
国際化に向けた取り組みを積極的に進めています。
そこで、現在の国際化の進捗状況や本研究科の魅力について、
大野欽司教授と留学生の皆さんに語り合っていました。

世界から注目される
最先端の研究内容

大野 | 本研究科では、世界で活躍できる
次世代の研究者を育成するために国際化
への取り組みを進めています。各国から優
秀な留学生を受け入れています。今日は
留学生の皆さんに本研究科の国際化の状
況や研究環境について意見を伺いたいと
思います。まずは自己紹介からお願いできま
すか。

リン | 中国出身です。神経遺伝情報学研
究室に所属し、神経筋接合部分子のスプ
ライシングについて研究しています。

クリーシング | ドイツから来ました。分子
腫瘍学研究室に所属し、肺がんのマイクロ
RNAをテーマに、その制御機構と標的遺

※1 / 分析機器部門
名古屋大学大学院医学系研究科・医学部の各種分析・計測機器を集中的に維持管理し、教育・研究および機器利用を支援する。学外者も利用可能。2004年に設置。

※2 / ジョイントディグリープログラム
オーストラリアのアデレード大学健康科学部と共同で「名古屋大学・アデレード大学国際連携総合医学専攻」を2015年10月に設置。



伝子について調べています。

アクタル | バングラデシュの出身です。細胞生理学研究室に所属し、聴覚神経細胞の軸索起始部におけるイオンチャンネルと分子の機能解析を行っています。

大野 | 医学研究を行う大学は世界中にあります。皆さんは、なぜ日本の名古屋大学を選んだのでしょうか。

リン | 母校である上海交通大学に名大の先生が大学紹介にいらしたことがきっかけです。大野先生のウェブサイトを見て研究の面白さに惹かれたと同時に、先生ご自身も長くアメリカで研究生活を送り、海外で学ぶことの大変さはよくわかっているという言葉に安心感を覚えました。

クリーシング | ドイツで通っていた大学では学部生のときに留学が義務づけられていて、日本文化に魅了されていた僕は、日本で学ぶことを選びました。そのとき既にマイクロRNAに関心があり、本学の高橋隆先生のもとで奨学生として3か月間インターシップを経験しました。その際、非常に有意義な時間を過ごすことができ、博士課程に進むならぜひこの研究室に入りたいと、ここへ戻ってきたというわけです。

アクタル | 私も学部生のときに岡崎の生理学研究所ヘインターシップに行き、研究の醍醐味に感動したのと同時に、親切的な日本人々にも感銘を受けました。そこで日本のいろいろな研究室を調べ、久場博司先生の研究内容に興味を抱いて本学に入学しました。

研究機器の共同利用や日本初の共同学位プログラム

大野 | 実際に本研究科に進学し、どのような点に魅力を感じていますか。

クリーシング | 東京大学でもインターシップを経験しましたが、僕はこちらの方が研究環境は上だと思えます。分析機器部門^{※1}の最先端設備は本当に素晴らしく、留学生へのサポートも手厚いので、研究に集中できています。

リン | そうですね。研究室はとても自由な雰囲気、教授は学生の意欲に任せて研究への挑戦を見守ってくださいます。学部教育

に関して言うと、3年次の段階で研究に打ち込めるカリキュラムとなっていることに驚きました。1年次にも研究ができ、研究に向かう姿勢が早期に養えるのではないのでしょうか。

大野 | 本学では最先端の研究設備を共有とし、誰でも利用できるように開放しています。これは全国の大学に誇れる体制です。また、学部3年次に半年間もの研究期間を設けているのも、日本では本学だけです。

アクタル | 母国の状況に比べると研究環境は充実していますし、事務の皆さんも親身になってくださるので不自由はありません。留学当初に日本語の集中コースで日本語を学べるのも魅力的だと思いました。

大野 | 留学生の受け入れには力を入れましたので、評価をいただけてうれしいですね。また、昨年から日本の大学では初となるジョイントディグリープログラム^{※2}をオーストラリアのアデレード大学との間でスタートさせ、世界基準の教育環境を構築しつつあります。これまで日本の大学が採用してきたのはダブルディグリープログラムで、日本と海外の大学で各4年間、計8年間学ばないと両大学の学位が取得できませんでした。しかし、このジョイントディグリーでは4年間で両大学共同の学位が取得でき、大変メリットがあります。今年からはスウェーデンのルンド大学との間でも始める予定です。



英語化を推し進め世界に開かれた大学へ

大野 | 本研究科では高度な研究力を世界にアピールするために、研究成果のプレスリリースを日本語と英語で同時に行っています。来年4月には一部日本語だった医学系研究科のウェブサイトも全ページ英語化する予定ですが、さらに世界に開かれた研究科となるためには何が必要だと思いますか。

クリーシング | キャンパス内の案内表示の英語化です。日本語のみの場合が多いですね。

大野 | おっしゃる通り、学内の案内表示や書類などの英語化についてはまだまだ改善の余地があります。既に修士課程の講義は全て英語で行っており、これは日本では先進的な取り組みだと思います。ただ、博士課程ではまだ3分の1程度。医学の研究内容を深く理解してもらうには日本語にならざるを得ない状況はありますが、さらに努力をしなければなりません。

アクタル | 講義に関して、「特徴あるプログラム」では4コース以上にわたり20コマ以上の受講が求められますが、英語化されているのが2コースのみなので留学生にとっ

ては、かなりハードルが高いです。留学生は2コースのみにするという方法もありますし、コース内に英語の講義をいれていただくなど、改善していただけたらうれしいです。

リン | 例えば、講義は日本語でも、スライドを英語化していただければ理解が進むと思います。

大野 | なるほど、確かにそうですね。皆さんの意見を参考に、検討していきたいと思います。

クリーシング | 日本の大学全体の問題かと思いますが、大学入学後、勉強に関心を失ってしまう日本人学生の態度も問題だと思います。ドイツでは医学生生の60%程しか卒業できないので、みんな必死で勉強します。また、英語でコミュニケーションを取ろうとしない日本人学生も多く、せつ々なので留学生と英語で交流してほしいなと思っています。

大野 | 日本語だけで生活できる環境が、日本人学生をそうさせてしまっています。日本は独自の文化を持っていますが、日本人はそれを知らず、世界から切り離されてしまっているところもある。それに気づくためにも日本人学生は留学生の皆さんと交流し、自らも世界に出て国際的な視野を広げることが必要でしょうね。

研究者として医師として未来に向かって

大野 | では最後に、皆さんの今後の目標を聞かせてください。

リン | 私は中国に戻り、良い医師になるのが目標です。中国では臨床医と研究者が日本のように区

別されていないので、研究も続けていきたいと思っています。

クリーシング | しばらく日本で研究を続け、いずれはドイツで研究者になりたいと考えています。世界中のがん患者さんを救うための研究がしたいですね。

アクタル | 私も研究を続けていきたいです。聴覚神経の研究で得た成果は、耳の病気だけでなく、他の神経の病気にも応用できるはず。私の研究が少しでも病気の治療に役立てばうれしいです。

大野 | 私自身は、日本の医学研究の向上を図りたいという希望を持っています。アメリカでは研究者が思う存分、研究に打ち込める環境がありますが、日本では研究者が教育研究以外の業務に追われ、研究と教育に注ぐ時間が十分とは言えません。こうした状況を変え、欧米の研究風土の良い部分を持ち込めば、間違いなく日本の研究力は倍増するでしょう。そうした未来を牽引する研究科として、さらに進化を遂げていきたいと思っています。

